

6. 水環境の保全

湿原の生態系と密接な関係を持つ河川水、地下水などの水環境の保全を図るべきである。

施策の背景

1) 河川水の保全

窒素の負荷量を指標として、約 2 割の削減を行うこととし、そのためには流域対策として緩衝帯、沈砂池を整備する。あわせて、個別対策として畜舎周辺における家畜ふん尿対策や施肥基準の遵守をはじめとする物質循環を考慮した営農を指導・支援・育成することが必要である。

- 堆肥やスラリーは、雨が降ったときなどに流れ出て水路や河川に流れ込む。
➡ そこで、水路や河川沿いに緩衝帯を整備し、水路や河川に流れ込む細粒土砂や栄養塩類を軽減し、河川水の保全を図る。
- 排水路に流れ込んだ栄養塩類は、河川に流れ込んで水質悪化の原因となる。
➡ そこで、排水路出口に沈砂池を整備し、河川に流れ込む細粒土砂や栄養塩類を軽減し、河川水の保全を図る。

2) 地下水の保全

釧路湿原を代表する環境の 1 つとして、高層湿原や赤沼、池塘といった貴重な湿原環境が挙げられる。

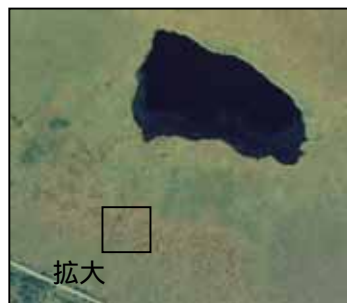
赤沼周辺に着目して過去の空中写真を比較すると、池塘が減少していることが分かった。これは、地下水位が低下したことにより池塘が縮小、あるいは、消失したものと推測された。

そのことを踏まえ、「地下水の状況を把握し、生態系との関連を検討する。」という以後の方針を示した。

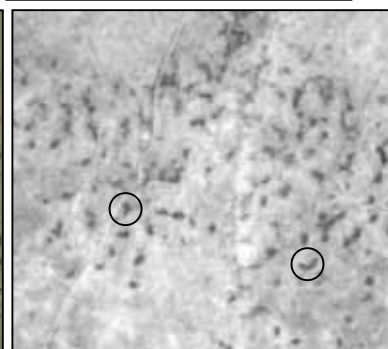
凡例
○: 同じ池塘



1977年9~10月



赤沼周辺全景



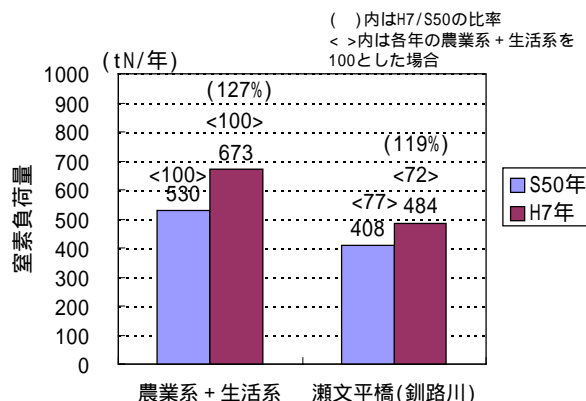
1995年6月

3) 水質の保全

窒素の負荷量を指標として、約 2 割の削減を行う。

河川水質改善の目標年を S50 年とすると、H7 年の負荷量 484tN/年よりも約 2 割の窒素負荷量が削減されれば S50 年当時と同程度となることから、**釧路川においては当面約 2 割の窒素削減を目指すものとする。**

河川負荷量の算定結果(各種水質測定結果より)
S50年 408tN/年 H7年 484tN/年
 $H7年 / S50年 = 484tN/年 / 408tN/年 = 119\%$
(20%の増加)



釧路湿原東部3湖沼の自然環境調査について

・自然環境保全上の問題点・課題

釧路湿原の東部に位置するシラルトロ湖、塘路湖、達古武沼は、流入河川や湧水などにより水が供給され、各種水生生物が生育し、湖沼の周辺にはヨシ等の低層湿原など多様な自然環境が残されている。

しかしながら当該3湖沼においては、近年、河川からの栄養塩類、土砂の流入等に伴う富栄養化や湖底の浅化、釧路川の逆流等により、複雑な生態系のメカニズムが変化しつつある。その結果、当該湖沼に生育する水生生物種の減少や生育環境の悪化など、自然環境や生育する生物の多様性に変化が生じつつあることが指摘されている。

水生植物は窒素・リンなどの栄養塩類を除去する働きがあり、水質浄化に果たす役割も大きい。シラルトロ湖、塘路湖及び達古武沼の3湖沼では、水生植物の確認種数はかなり減少している。特に1991年から2000年の減少が著しく、シラルトロ湖では22種から14種、塘路湖では12種から8種、達古武沼では20種から14種に減少している。



達古武沼のアオコ発生状況(2003.7月撮影)